

# 第29回「妙なる畑の会・全国実践者の集い」のご報告

(2026年2月21日～23日開催)



福岡自然農塾では過去に4回「妙なる畑の会・全国実践者の集い」を開催してきましたが、15年ぶり、5回目となる「妙なる畑の会・全国実践者の集い」(2026年2月21日～23日)を開催し、無事終了することができました。

川口さんの呼びかけに始まって、全国に広まった自然農が、今を生きる私たちにとって、ますます求められ、重要な存在となっていることを自覚する今、150名という多くの仲間が共に集い、言葉を交わしましたことは、たいへん有意義だったのではないかと考えております。実行委員長を務めました、鏡山英二が、ちょうど一週間前に病で倒れ、にもかかわらず、多くのスタッフが心を一つにして、その運営に取り組み開催を終えることができました。

その本人も、現在は退院しまして、リハビリも行いつつ、ほぼ、元の生活に戻りつつあります。

皆様には、たくさんのご感想と共に励ましの言葉を頂き本当にありがとうございました。

さて、今回のテーマは

- ・ 人類の歴史から学ぶ、主に文化財を巡る現状に思いを馳せながら永続可能な社会を私たちはどう実現していくか。
- ・ 人としての本当に大切なもの、生きるに必要なものは。

でした。

文化財は私たちが人間としての生き方を営む上でも大きな役割を果たしているように思います。現代は経済優先の時代にあると感じますが、経済活動に終始するだけでは、私たちの人間らしい生き方は保証されないでしょう。人間には自身を奮い立たせ、やすらぎを与えるような精神的支柱が必要であると考えています。その一つとして、保護法の定義で文化財の芸術的価値に触れていたことに注目したいと

思います。私たちは日常生活のなかで、絵画や彫刻、音楽や演劇などを鑑賞し、やすらぎを得ることがあります。特に、仏像や仏画といった仏教に関わる文化財を専門にしている私にとっては、芸術には「祈り」とも強く結びつく側面があるように思います。美しい仏像は高い芸術性を誇りますが、それを生み出した背景には、人々の祈りの心があります。そして、こうした祈りの心をはぐくんだのは、科学も未発達だった時代においては、山・海・川、大きな木や岩といった自然であったと考えられます。自然との関わりの中から、すぐれた芸術が生まれ、これが時代時代の人々によって守り伝えられ、今日の文化財へとつながっていると いえます。今日に伝わるすばらしい文化財の数々は、かつての自然と人との絶妙な関係性が、その素地をかたちづかったと いうてよいと思います。

参加者のお一人おひとりにとって、その言葉がどのように入っていったかはわかりませんが、川口さんがかつて、よく話して下さったことの中に「学びは学ぶ側にかかっている」ということがあります。この難しい世の中を生き抜いていくのに、今回の学びが、解決への道筋、あるいは、そのきっかけとなって、少しでも良き働きをしてくれることを願っています。

学習会の中半からは、福岡自然農塾にて学び、自然農を暮らしの中心に据えた、3名（井手裕一、柴田浩之、古賀正慎）の発表と資料をもとに、会場の皆様と 言葉をかわし、テーマを深めることもでき、有意義な学習会となったと思います。

たった一日半の言葉を通しての学びでしたが、この日の語らい、そして、各々の心に響いたものを大切に、また、育て、ふくらませ、さらに、一人ひとりの成長につなげてゆかれることを願っています。

私達も、福岡のスタッフ一同、今回の学習会に各々精一杯取り組みましたこと、共に学べましたこと、本当にありがたく思っております。

至らぬことも多かったことと自省しておりますが、私達もこれからの日々の暮らしを充実させ、人としての生命のいとなみを、限りなく成長へとつないでゆけますよう歩んでいこうと心あらたに致しております。

ほんとうにありがとうございました。

福岡自然農塾代表 鏡山悦子